

「2大特産野菜の産地力増強プラン」



1.対象地区	・・・P1
2.現状と課題	
白ねぎの推移	
大山ブロッコリーの推移	
3.産地力増強プランの方向性とJAの役割・具体的な目標値	・・・P3
4.課題に対応した具体的な取組み	・・・P6
プランの概要図	・・・P8
5.機械導入の必要性	・・・P9
6.プランの推進体制	・・・P10
7.支援事業の内容	・・・P11

2大特産物が切磋琢磨し進化する産地へ

JA鳥取西部

「2大特産野菜の産地力増強プラン」

(品目：白ねぎ・大山ブロッコリー)

1. 対象地区

米子市、日吉津村、大山町、南部町、伯耆町、江府町、日野町、日南町

※ 米子市の弓浜地域及び境港市の白ねぎの生産振興等は、「弓浜農業未来づくりプロジェクト事業」を活用。

2. 現状と課題

鳥取県西部を代表する2大特産野菜でもある白ねぎ・大山ブロッコリーは、地域営農の柱となっている特産野菜であり、白ねぎが22億、大山ブロッコリーが12億を超える販売高を誇っている。これまで、弓浜地域以外の水田地帯、畑地帯、中山間地帯で、それぞれの地域特性に応じ、生産指導・面積拡大を図ってきた。

先人のたゆまぬ努力と鳥取県西部の特産物を育てる等の思いが引き継がれ、西日本を代表する産地としての地位を確立してきたが、次のような課題解決を進め、産地力を増強していくことが必要となっている。

(1) 白ねぎ

弓浜地域の砂丘畑を中心に栽培が始まり、徐々に水田地帯の転作作物として大山山麓等の中山間地でも栽培され、秋冬どりの面積拡大、更に春どり、夏どりの栽培を組み合わせた全国的にもあまり類を見ない周年出荷産地を形成し、関西市場を中心に鳥取産ブランドの白ねぎとして高く評価されるようになった。さらに、県東・中部にも広がって、本県を代表する特産物となっている。

しかし、近年は、高齢化等により、面積・生産者数・出荷量が減少し、労働力の不足による規模縮小も重なり、新規就農者は増加傾向にあるものの栽培面積の減少傾向が続き、平成18年産の栽培面積315haに対し、平成23年産が244haと5年間で急激に減少した。

特に、近年の夏場の猛暑により夏ねぎの栽培面積・出荷量が激減し、周年出荷体制にかげりが見え始めた。労力不足等により総体的な栽培面積・出荷量が減少し、市場等からブランド力への悪影響が頻繁に聞かれるようになった。

生産現場では、労働力の不足による規模縮小をはじめ、高齢化等により、面積・生産者数・出荷量が減少し、更に、温暖化・気象災害の影響回避の技術導入が望まれている。

また、水田地帯（転作田を活用）の栽培では、降雨時の排水対策が一番の課題となってきた。

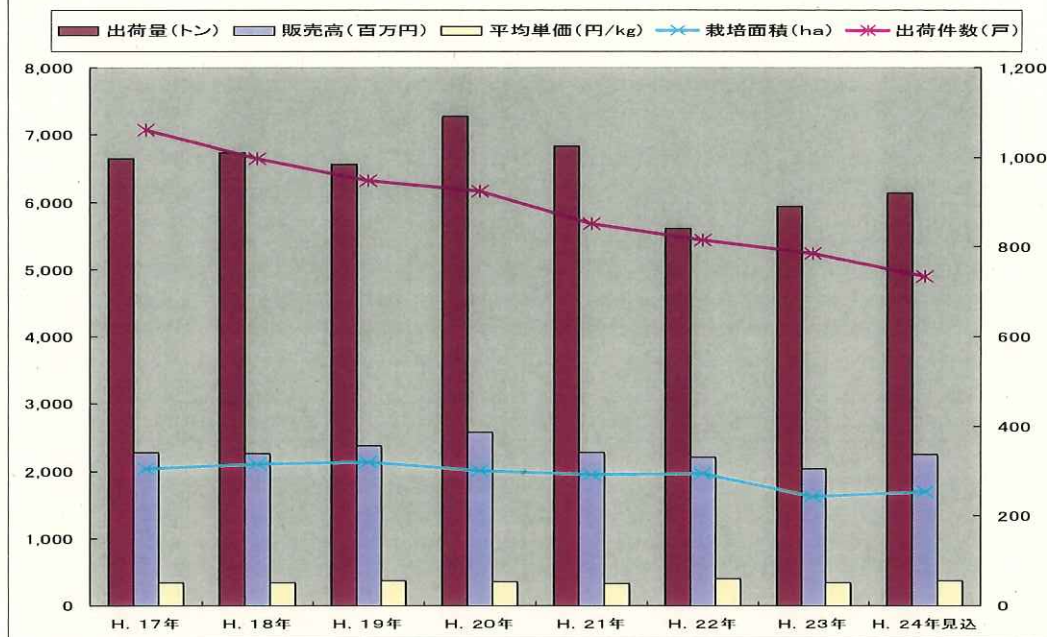
生産者の規模拡大・農地の利用集積等を図るため、新たな農作業受委託体制の構築を図る必要がでてきている。

作業受委託体制の整備においては、育苗から定植作業の要望が多く寄せられ、面積拡大における大きな課題となっている。

ブランド力と周年出荷体制を維持するためには、年間を通じて安定的に市場流通するだけの栽培面積の拡大対策が必要となっている。

そのため、生産者の規模拡大・農地の利用集積等を図るための新たな農作業受委託体制の構築が急がれている。

JA鳥取西部白ねぎ販売実績推移表(年産)



	H. 17年	H. 18年	H. 19年	H. 20年	H. 21年	H. 22年	H. 23年	H. 24年見込
出荷量(トン)	6,653	6,739	6,569	7,278	6,828	5,611	5,936	6,130
販売高(百万円)	2,281	2,266	2,384	2,583	2,281	2,205	2,032	2,250
平均単価(円/kg)	343	336	363	355	334	393	342	367
栽培面積(ha)	305	315	320	302	292	295	244	254
出荷件数(戸)	1,061	998	947	925	851	816	785	734

(2) 大山ブロッコリー

平成 9 年頃からの緑黄色野菜ブームと消費者の安心・安全志向と価格安定が重なり、平成 14 年には 157.8ha が平成 23 年には 399.9ha と大幅に増加し、平成 20 年度は販売額が 10 億円を突破する特産物となった。

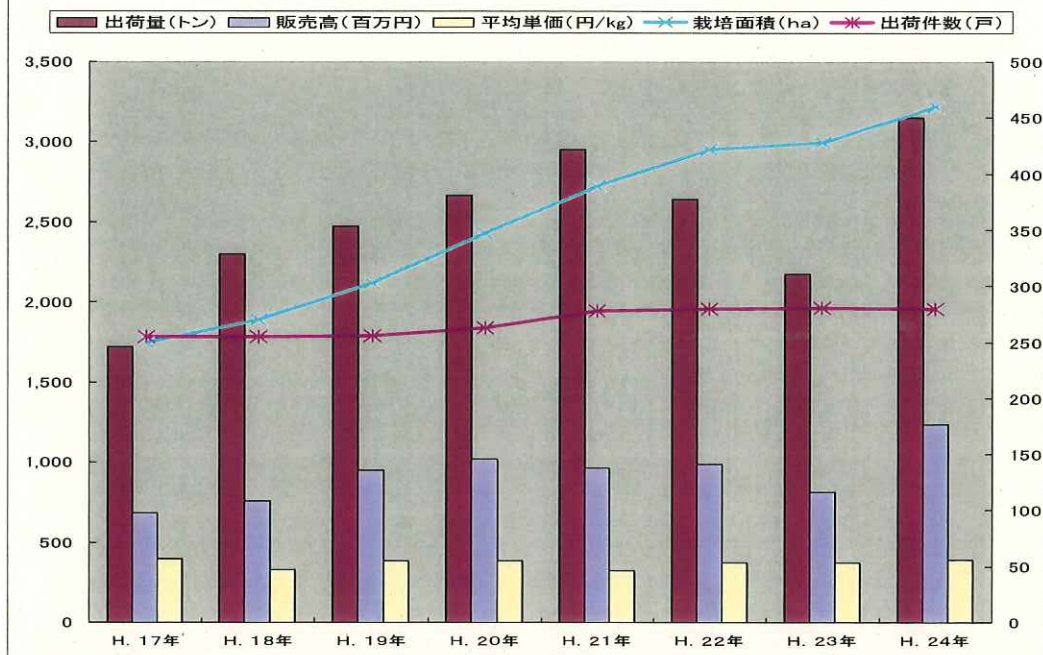
栽培は、大山町から中山間地域(広域)へ拡大し、初夏どり、秋冬どりの 2 期栽培を基本に圃場ローテーションを展開しながら、良質な規格品を安定して市場出荷している。

しかし、最近の産地を巡る情勢は、栽培農家の高齢化、外国産の輸入量増加、国内他産地の台頭、価格低迷と資材費高騰、猛暑・集中豪雨等の異常気象の多発などの要因が複合的に重なって、生産量(市場流通量)が低下、産地ブランド野菜としての地位が揺らぎはじめています。

また、ブロッコリーは、気象災害の影響を受けやすく、平成 23 年産は、良質な規格品の出荷量が激減。市場評価を下げるとともに、単位収量の減少により生産農家の経営を圧迫してきている。

生産者からは「現状の栽培体系で大丈夫なのか？」など、災害に強い技術体系への取り組みが不可欠との意見が多数寄せられる。

JA鳥取西部ブロッコリー販売実績推移表



	H. 17年	H. 18年	H. 19年	H. 20年	H. 21年	H. 22年	H. 23年	H. 24年
出荷量(トン)	1,720	2,303	2,476	2,667	2,956	2,640	2,175	3,153
販売高(百万円)	684	759	949	1,021	963	989	814	1,237
平均単価(円/kg)	398	330	383	383	326	375	374	392
栽培面積(ha)	250	270	303	347	389	422	428	460
出荷件数(戸)	255	255	256	263	278	280	281	280

3. 産地力増強プランの方向性と JA の役割、具体的な目標値

(1) 産地力増強プランの方向性

白ねぎは、平成 24 年度から弓浜農業未来づくりプロジェクト事業がスタートし、弓浜地域全体が活気に満ちてきており、農家の栽培意欲、面積拡大、新技術導入へ向けた動きが顕著に見られるようになってきている。

また、平成 24 年度には、品質向上に向けた取組みとして、管内全域で出荷検査員制度を導入し、個別選果で持ち込まれるものを検品確認する仕組みを確立した。

大山ブロッコリーについては、平成 23 年産が度重なる自然災害により収穫皆無が続き、産地としての危機を迎えていたが、県・市町村・JA グループが一体となり産地再生のための支援事業を展開した結果、農業者の生産意欲が持ち直してきている。

平成 24 年産は、販売単価が安定、天候にも恵まれ順調に出荷数量を伸ばし、過去最高の販売高をあげる結果となった。

天候に左右される度合いを減らす新技術導入（高畝栽培・圃場均平等）の必要性を再確認した。

このような中、産地の現状は、近隣の圃場に利用権を設定し、賃貸借により大規模に営

農経営を行う専門的農家と圃場の維持管理・自己農地保全のため営農継続を行う小規模農家、就農研修を終え新たに営農を開始する意欲あふれる新規就農者、企業参入等の生産者が、自己生計を確立すべく営農に取り組んでおり、それぞれの農業経営体が地域・生産部会・出荷等のつながりで、産地を形成している。

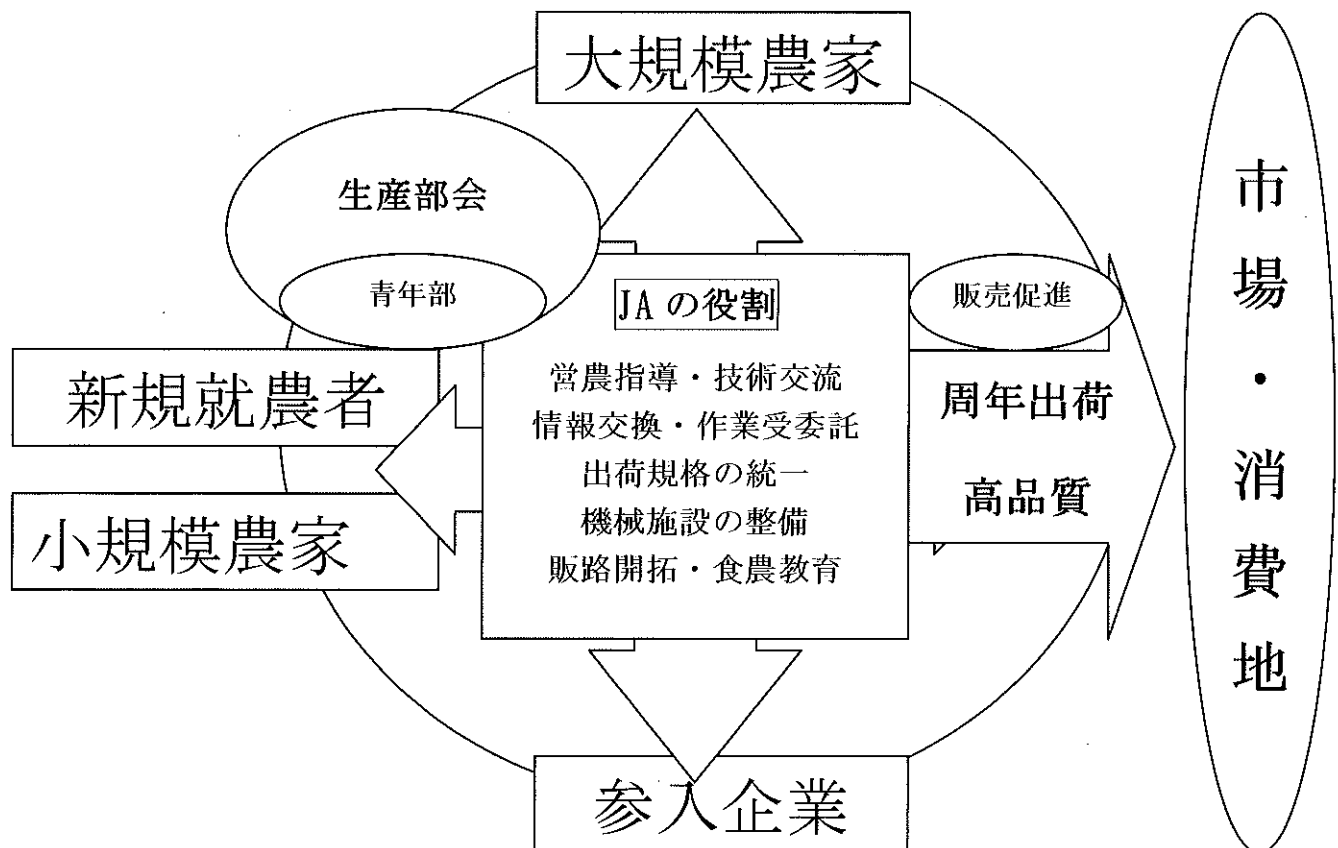
今後、産地として発展していくためには、実情に応じた地域連携、作業受託体制の整備、ブランド野菜の産地・生産者としての意識改革が必要となってきた。

JA 機能を発揮し、地域を一つの営農集団と位置付け、地域を一体的に発展させる体制を確立することにより、「大規模経営者」・「小規模経営体」・「新規就農者」・「企業」等を技術交流、機械利用、作業受委託等により融合し、地域連携を確立、生産基盤の強化を図り、産地として進化していく体制を築きあげることが重要と考えている。

また、作物ごとに、青年部を組織し新規就農者を含む次世代対策を充実し、営農センターを中心に、技術交流・情報交換等を活発に行い、産地の活性化と生産技術の高位平準化を図るとともに、栽培管理の徹底、出荷基準・規格の遵守、出荷検査体制の整備等により、良品質の農産物を安定的に出荷する体制の構築へ向け動き出した。

西日本を代表するブランド野菜の産地として、高品質で安定出荷することはもとより、地域が一体となり、生産力（栽培面積の確保・確固たる担い手）栽培環境（作業受委託体制）、販売戦略（試食宣伝・消費者交流・食農教育）を総合的に整備することにより、さらなるブランド化を推進し、鳥取県の営農をリードする地域として、市場、消費者から選ばれるブランド野菜として安定的な出荷体制の構築に取り組み、消費宣伝 PR・次世代への食農教育と組み合わせ、「鳥取の白ねぎ」・「大山ブロッコリー」を消費地へ発信したい。

JA 機能の発揮による 2 大特産野菜産地の形成



(2) 具体的目標値

①【生産目標】

(ア) 白ねぎ

地域ごとに配置してある営農センター（営農拠点）を中心に周年供給体制を強化する。

春ねぎ、夏ねぎ、秋冬ねぎの作付拡大

栽培面積：105ha ⇒ 130ha（西部農協管内では、255ha ⇒ 300ha：250万ケース）

【白ねぎの営農センター別・作期別栽培目標】

面積：ha

品目名	項目	中央	南部・伯耆	大山	日野	合計	弓浜	合計
春ねぎ	28年目標	7.6	4.4	9.0	0.0	21.0	52.0	73.0
	24実績	5.5	2.0	5.8	0	13.3	43.7	57.0
夏ねぎ	28年目標	6.2	12.2	9.1	8.5	36.0	46.0	82.0
	24実績	3.8	9.5	6.7	6.0	26.0	39.0	65.0
秋冬ねぎ	28年目標	21.8	20.7	18.8	11.7	73.0	72.0	145.0
	24実績	19.8	19.4	18.1	9.1	66.4	65.6	132.0
合計	28年目標	35.6	37.3	36.9	20.2	130.0	170	300.0
	24実績	29.1	30.9	30.6	15.1	105.7	148.3	254.0

(イ) 大山ブロッコリー

年間（初夏どり、秋冬どり）単収の向上（現状単収の20%増）

【大山ブロッコリー】

地域別設定

単位：10aあたり

市町村名	現状		目標	
大山町	129	ケース	155	ケース
米子市	127	ケース	153	ケース
日吉津村	121	ケース	146	ケース
南部町	120	ケース	144	ケース
伯耆町	78	ケース	94	ケース
江府町	83	ケース	100	ケース
日野町	80	ケース	96	ケース
日南町	88	ケース	106	ケース
*1ケース 6kg				

年間出荷目標：70万ケース

<目標管理の拠点>

大山営農センター、中央営農センター、南部伯耆営農センター、日野営農センター

（弓浜地区においては、弓浜営農センター）

②【新たな担い手の育成目標】

(ア) 新規就農者

<現状>

品目 \ 年度	H19	H20	H21	H22	H23	計	備考
白ねぎ	2	2	9	2	1	16	弓浜除く
大山ブロッコリー	1	2	4	5	2	14	
計	3	4	13	7	3	30	

<目標>

品目 \ 年度	H25	H26	H27	H28	H29	計	備考
白ねぎ	4	4	4	4	4	20	弓浜除く
大山ブロッコリー	3	3	4	4	4	18	
計	7	7	8	8	8	38	

(イ) 作業受託組織の育成

営農拠点である営農センターを中心に組織化、仕組みづくりを図る

現状 0 ⇒ 4 組織 (共通)

地域の実情に応じた農作業の受委託体制を構築し、不足する労力を補完する仕組みづくりを行う。(地域の実情に応じた組織化を支援する。)

4 課題に対応した具体的な取組み

(1) 【生産力向上対策】

市場への安定供給と供給量の確保、高品質で一定水準の規格品出荷へ向けた取組み
単収向上へ向けた技術向上対策

①地帯別試験圃の設置による技術革新

(ア) 各地区共通課題：栽培管理の安定化を目指した排水対策

砕断ロータリー等による耕盤破碎、溝堀機等による額縁明渠の施工 等

(イ) 乾燥地帯：散水設備の整備

②堆肥投入（環境にやさしい農業・循環型農業の推進）の促進

(ア) 地域の資源を有効活用することと、減化学肥料栽培の推進による堆肥投入

(イ) 地帯別に必要量を把握し耕畜連携の促進

③面積拡大へ向けた技術対策として地域の実情に応じた連携しやすい組織の育成。

(ア) 気象災害に強い栽培技術の普及

生育初期の霜、強風対策として不織布の活用推進

夏期の高温対策として、地温低下による生育促進のための、夕方灌水技術の確立

(白ねぎ)

定植直後の湿害対策としての高畝栽培（大山ブロッコリー）

(イ) 優良種苗の増殖（白ねぎ）

出荷量の激減する夏ねぎの安定出荷ができる体制の整備

④「共同選果場」の整備（白ねぎ）

(ア) 年間で出荷がピークを迎える「秋冬ねぎ・春ねぎ」で、適期収穫・出荷を促進するため、地域の出荷実態にあった施設整備を行う。

(2) 【人的体制の強化】

①作業受委託体制の整備と組織化、労力軽減、機械施設の有効利用を図る。

「育苗⇒定植」：初期作業の委託体制を整備することにより、小規模農業者の労働力をカバーする

必要に応じて、作業の受委託を追加できる体制を整備する。

② 規模拡大に必要な機械設備の整備

経営計画（栽培計画）に沿った機械設備の整備を行う。

（導入を計画する機械の費用対効果を検証）

③ 新規就農者・雇用の確保、経営安定へ向けた栽培指導の充実と経営指導

関係団体との連携（担い手育成機構：アグリスタート研修等）を強化する。

④ 規模拡大希望者への農地集積、マッチング

農地情報の収集・提供を円滑に行い、規模拡大希望者へのマッチングを関係機関と連携し実施する。（円滑化団体・農業委員会等との連携）

⑤ 青年部組織の育成

若手農業者の連携促進により、活性化・相互研磨を図る。

情報交換会等により、新規就農者への技術支援体制を構築する。

作物間を超えた営農情報の交換・技術交流を図り、高位安定した技術体系を構築。

(3) 【農地改良対策】

①排水対策に係る実証圃を設置する。

（ア）耕盤破碎、額縁明渠、レーザーレベラーによる圃場均平を図り、作柄の安定を目指し、排水対策を確立し、初期成育の促進・自然災害の回避を図る。

(4) 【周年販売力の強化】

①周年供給を全面に打出し、主力市場への消費宣伝強化による知名度向上。＝共通

②食農教育による PR 活動の推進を図る。＝共通

③消費者とのふれあい交流を行う。＝共通

④料理レシピの提案を消費宣伝に取り入れる。＝共通

⑤白ねぎ改良協会、大山ブロッコリー井戸端会議と連携し、販売戦略を立てる。

⑥こだわり栽培（特別栽培）の促進

白ねぎ：伯州美人

大山ブロッコリー：きらきらみどり

⑦マスコットキャラクターの活用による認知度向上を図る。

白ねぎ：ヨネギーズ

大山ブロッコリー：ロッコとリーブ

⑧白ねぎの販売戦略

「ゲゲゲの鬼太郎とのコラボ」「白ねぎ料理認定店制度」「スタンプラリー」等により、地元消費の拡大・情報発信を行う。

⑨大山ブロッコリーの知名度向上・ブランド力 UP 戦略。

地域団体登録商標の取得

⑩地元高校との連携（新料理開発）＝共通

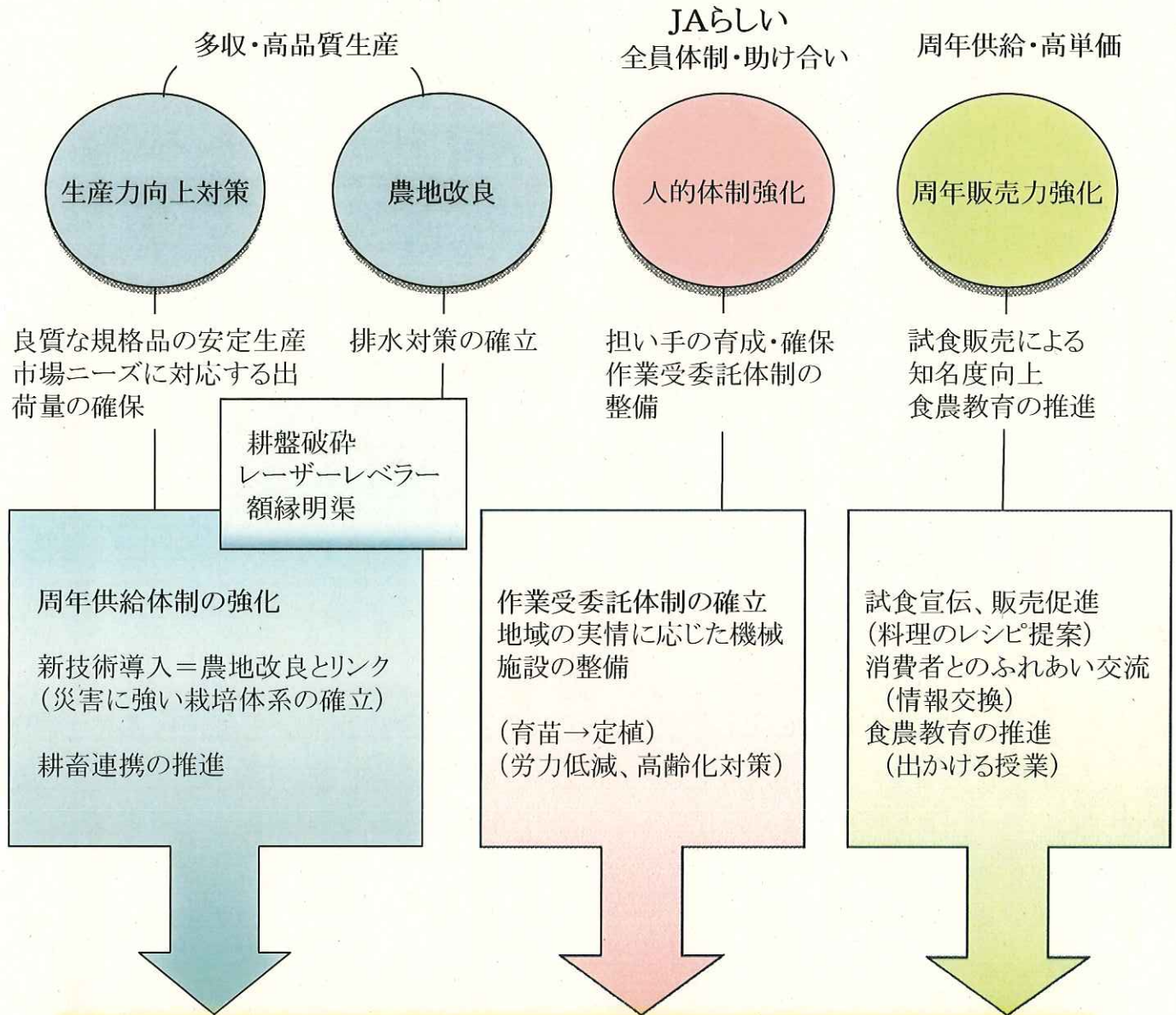
加工品開発（白ねぎ：ねぎ醤油、ブロッコリー：ジェラート等）

⑪部会活動の活性化を図り、農業者自らが消費地へ出向いての販売促進を行う。

販売戦略の一つとして、関西スーパーへの PR 活動として生産者と生産者団体が一体となった販売宣伝を行う。

(5) 【プランの概要図】

白ねぎ産地・大山ブロッコリー産地



産地力の増強

- 活々とした生産者の増大
- 経営の安定と発展、地域の活性化
- 農地の有効活用・利用増進

5 機械導入の必要性

(1) 白ねぎ

水田地帯（転作田を活用）での栽培管理であり、排水対策が一番の課題であることから、砕断ロータリー・溝堀機等の整備が必要である。

一方で、周年出荷を確立するにあたり、夏ねぎの出荷量を確保する必要がある。そのためには、優良苗（坊主知らず）の増殖や高温時の地温の低下による生育促進を行い、ねぎの成長を促す夕方散水に必要な設備の整備を図りたい。

また、労力の軽減を図り生産者の規模拡大・農地の利用集積等を図るため、新たな農作業受委託体制の構築を図る必要がある。特に、作業受委託体制の整備においては、育苗から定植作業の要望が多く寄せられ、共同育苗施設と定植機を整備していく必要がある。

これらの取組みを後押しできる支援が必要となってくる。

(2) 大山ブロッコリー

順調に栽培面積を増大してきているが、規模拡大を図れば、定植・管理・防除・収穫といった一連の作業が重なる期間があり、特に秋冬作で作業が重複し、大規模農家にとって適期作業の実施が困難になっている。

作業遅れや管理不足は品質低下へつながり、単位面積当たりの収量（出荷量）低下を招く、それを回避するための作業が早朝からの作業となり、連続する長時間労働は、過労・健康上の問題を心配する声も上がっている。

産地としての維持拡大へ向け、作業の効率化と労力軽減のために、全自動（半自動）定植機・管理機・溝堀機・ブームスプレイヤー（防除機）・マニアスプレッダー（堆肥散布機）・ブロードキャスター（肥料散布機）・フレールモア（緑肥細断機）・収穫機等による機械化体系の整備及び作業受委託体制の整備が必要となっている。

また、度重なる自然災害により、収入源を絶たれ、経営を圧迫し、生産意欲の低下を招く事態となった。このことから、排水対策の充実へ向けた機械整備が必要である。

秋冬ブロッコリー栽培の作業時期

定植（機械定植）作業：8月～9月

中耕、土寄せ作業：8月中旬～翌年1月

防除作業：8月中旬～翌年2月上旬

収穫作業：10月～翌年2月

(3) 必要とする機械設備

①規模拡大等に対応する機械設備。

⇒大型トラクター、マニアスプレッダー（肥料散布機）、ブームスプレイヤー（農薬散布機）、フレールモア（緑肥細断機）、セット動噴、溝堀機、収穫機、乗用管理機、全自動定植機、細断ロータリー 等

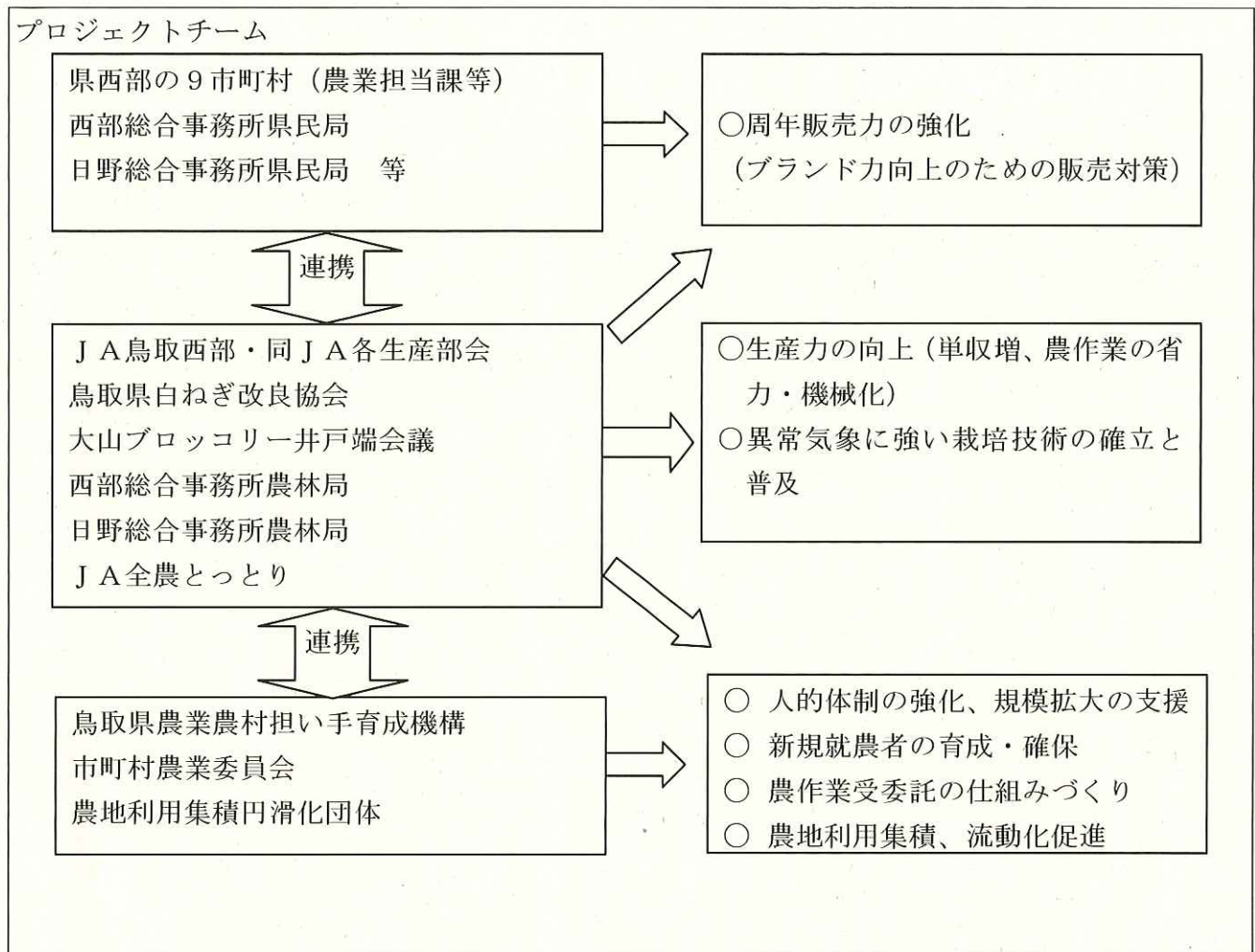
②新規就農者等の営農計画を支援するために必要な機械設備。

⇒トラクター、小型管理機、育苗ハウス、定植機、セット動噴、白ねぎ出荷調整用機械設備 等

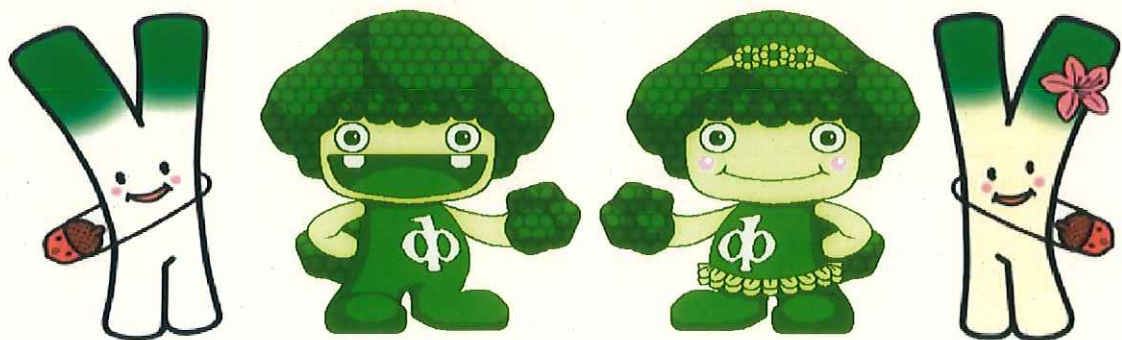
③企業等への支援：異業種参入であり、多種多様な機械設備。

⇒①～③に記した機械設備 等

6 プランの実施体制（共通フロー図）



2 大特産物が切磋琢磨し進化する産地へ



「白ねぎの産地再生」・「大山ブロッコリーの産地ブランド力強化」へ向けた取組みとして、地域農業の活性化へ向け生産者・生産者団体の思いを一つに、地域・関係機関が一体となった事業展開を。・・・by ヨネギーズ・ロッコとリーブ

7 支援事業の内容

区分	事業内容	事業費 (単位:千円)					事業主体
		H25	H26	H27	H28	H29	
生産力向上対策	<p>渇水・猛暑対策、排水対策、単収向上・経営安定等の被害軽減に資する新技術実践に資する新技術に係る経費</p> <p><ソフト></p> <p>①土作り・土壌改良及び耕畜連携促進・循環型農業の推進に係る経費 (白ねぎ: 30a × 2t × 65 圃場) (大山ブロッコリー: 10a × 1t × 10 圃場)</p> <p>②新品種・新技術導入に係る試験 営農拠点を中心に実施 (大山営農: 2、中央営農: 2、南部伯耆営農: 2、日野営農: 2 計 8)</p> <p><ハード></p> <p>③夕方散水等の設備導入に係る経費</p> <p>④共同育苗に係る施設 JA 主体により実施</p> <p>⑤ニ共同選果場に係る設備 JA 主体により実施</p>	10,000	10,000	2,000	2,000	2,000	生産部会 生産組織 利用組合 JA 等
	⑤優良苗の増殖	100	—	—	—	—	JA
人的体制の強化	<p>面積拡大・出荷量増大に向けた取組みを有する組織を担い手組織と位置づけ、産地力増強計画を検証し支援する。</p> <p><ハード></p> <p>①担い手農業者、生産組織の規模拡大等に 必要な機械施設 定植機、防除機、溝堀機、緑肥細断機、破断ロータリー、マニアスプレッダー、管理機等</p> <p>②新たに農作業受託を開始又は受託面積の 拡大に必要な機械 ①の機械施設同様</p>	76,000	76,000	84,000	9,000	9,000	生産部会 生産組織 利用組合 JA 等

農地改良	<p>排水対策を含め湿害による生育不良を回避することを目的とする。</p> <p><ソフト></p> <p>①高性能農業機械の耕盤破碎による排水改善技術の実証</p> <p>②高性能農業機械の圃場均平による排水改善技術の実証</p> <p>③高性能農業機械による高畝栽培技術の実証</p> <p>営農拠点を中心に実施 (大山営農:5、中央営農:4、南部伯耆営農:3、日野営農:3 計15)</p>	900	900	900	900	900	
周年販売力の強化	<p>①販売促進</p> <p>②食農教育</p> <p>③産地 PR 等</p>	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	大山プロ ッコー 井戸端 会議 JA 等
	事業費合計	90,000	89,900	89,900	14,900	14,900	299,600

JA 鳥取西部 事業実施体制図

- (1) 生産者大会・販売促進等に係る特産物振興大会において、取組み内容の周知を行うとともに、産地としての姿勢を PR、もって、「元気な産地」を発信する。
- (2) 管内の生産拠点に設置してある営農センターを中心に事業推進を実施。
- (3) 関係市町村との連携により、円滑な事業展開を行う。

